

溺愛する息子のアナタによる凶な要求を断り切れないダウナー系の教育ママに、淫語まじりの耳舐めマザコンプレイなどエロいことばかり、ひたすらしてもらう甘々な日常

◆第一章 パートの飲み会で酔って帰宅した母親と、ちょっと変な空気になったから思い切ってオナニーを見てもらう！

『ガチャ』

「ただいまぁ……」

「……あ、まだ起きてた？」

「……んー？ 飲み会だし……店長に結構すすめられちゃってねえ……」

「ビールと……焼酎ちょっと……」

「ww まあ、結構、飲んじやったかもねー」

「ま、お父さんも今日、出張だし、たまにはいいわよねー」

「えー？ ww いやいや……女っていつでも、もうオバサンだからねー……」

「えええ？ 狙われてないってww 興味ないでしょー、さすがに、もうオバサンだし」

「ほら、上司って、別に女だけじゃなく、部下にはお酒を、すすめるからあ」

「え？ そう？ 別にわざとじゃないけど……胸のライン強調してる？ この服……」

「ブラ透けてるう？ うそぉ……」

「でも、別に誰も気にしてないっしょ……オバサンだし……」

「ええ？ ww うそぉ？ 色気、あるかなあ……？」

「……はあ？　なんでアンタが興奮すんのよー……」

「エモいってなによww」

「ええ？　年上好きって……　せいぜい、年上っていつでも、3つか5つかじゃなくてえ……？」

「えええ？ww　四十代のAVとか……？　見てるの？」

「うそお……。　若い子より、いいの？　えー……」

「……なんですよ」

「よくわかんないけどエロいって、何よww」

「はあ……はいはい、わかったわよ」

「はい、これからは、気を付けるわよ」

「……ええ？　はああ？ww　勃っちゃったって何よww」

「ちよつww　何？　何？　えー？？」

「なんでなんで？　今ので、なんで勃つのよww」

「ええ？　会話がエロかったの？　うっそおww」

「ぜんぜんわかんないww」

「www」

「……確かにっw　ちよう TENT 張ってるじゃんw」

「えええ？　お母さんの、おっぱいで？　こうなっちゃったの？」

「えええ？　でも、服、着てるじゃん。　おっぱい見えてないでしょ」

「……ふーん……見えてなくても、エロいんだあ……」

「へええ……」

「はい……勉強になりましたあ……」

「……ちよつとおwww いつまで見てんのよーwww」

「いや、確かにこれで外歩いてたけど……さすがに、そう言われてからそんな見られたら恥ずかしいわよwww」

「シコいつてなによwww」

「……もつおお……こらあ……怒るよwww もおお……」

「わかったからっ……これから、ちゃんともうちよつと隠すからあ……」

「ちよつとお……店長よりずっと、アンタの目のほうが怖いんだけどお……」

「……なによお……」

「ちよつ……近い、近いっ……」

「ええ??」

「オナニー……って……アンタ、ちよつと……」

「そういうのは、自分のお部屋でやんなさいよ……」

「ええ……? 最初に興奮したネタじゃないと、盛り下がる、って……?」

「……ちよ、ちよつとお……脱がないでよお……」

「やだあ……もお……」

「ちよっ……やっ……なんか、はねたっ……」

「ちよっ……もおお……我慢汁っ、て……アンタねえ……」

「(はあああ……)」

「もう……」

「……早く、終わらせてよお……」

「えええ？ おっぱい隠すなって……」

「……やあよお……」

「えええ……？」

「これでいいの……？」

「……はあ？ もっと胸張って……アンタ、ちよっと、いい加減にきなさいよお」

「……どう？」

「えええ……腕を組むの？」

「……こう？ かしら……？」

「……ったく、もおお……」

「(はあああ……)」

「……気持ちよさそうな顔しちゃって、まあ……」

「オバサンのおっぱいの、なにがいいんだか……」

「w w アンタ、はあはあ、言い過ぎよ」

「エッチのときそんなハアハア言ったら女の子に嫌がられるわよ」

「ふふ……」

「一生懸命になっちゃって、まあ……」

「気持ちいいの？」

「……ふーん……」

「……そうやってオナニーするんだねー」

「そこが気持ちいいの？」

「んー？ だって、指で、そこばかりコスってるから……」

「へええ……、そこが特に気持ちいいんだ？」

「ふうん……そうなんだ……右手だと、そこにあたりずらいんだ……」

「へええ……」

「おいっちにっ♡おいっちに♡」

「ふふ♡」

「あらあら、必死でコいちゃって、まあ……」

「……はあああ……タプタプしたタマタマしちゃってえ」

「ここにいっぱい性欲が溜まってるのねえ……」

「あ……」

「ふふ……アンタ、逝きそうでしょ」

「ええ？　だって、たまたまが上がってきてるもん」

「あー……きてるきてる」

「ふふ……あーあー……もう喋る余裕もないんだあ」

「……あっ……あっ……あ……出た、出たっ」

「っと、っと……」

「……おーおー……まだ出るの……」

「すごいわねえ、若いって……こんなに溜まってたら、まあ……我慢できなくなるわなあ」

「……なあにボケた顔してんのよww」

「アンタ、ちゃんと自分で掃除しときなさいよ、自分で出したんだから」

「タンパク質はちゃんと掃除しとかないと後で、掃除が面倒になるんだからね」

「……雑巾？　ったくもお……」

「普段、全然手伝わないから、こういうときに雑巾がある場所もわかんないのよ？」

「ちよつとアンタっ……もお……そのまま歩かないでよ」

「おちんちんの先から、精子が垂れてるじゃないの」

「あー……じゃあもういいから。ティッシュ持ってくるからちよつと動かないで待ってなさい」

「ったく……もおお……」

◆第二章 この前のことが忘れられないから、シコいママに、シラフでも、オナニーの相手をしてもらう！

「いってらっしゃーい♡」

『ボタン』

「ふう……」

「これで、ようやく、ちょっと一息……きやああっ!!」

「つつ、ちょ、っとお……」

「音もなく、後ろに立たないでよ……」

「……もおお……ビックリしたあ……」

「……何よ……」

「……は？ いやいや……駄目よ……」

「オナニーのお手伝いは、この前で最後っ……だあめ……」

「ホントは、この前のだって、ダメなんだから……」

「……この前は、酔ってたし……アンタも、我慢できそうにない感じだったし……」

「きやああっ!!」

「つつちょ、っどお、っ……なに、よ、お……」

「つつはあ？ 今も、我慢できないって、何よお……」

「ちょっと、ホント……放してよっ……」

「ホント怒る、わよっ……?」

「つつちよっ、とっ……こら、っ……胸、揉まないでよっ……ちよっ、とおお……」

「やだっ……もお……」

「こら、あ……」

「おつきいね、じゃないわよっ……こら、あっ……」

「やだ、って、ばあ……」

「こんな大きいの毎日見せつけられたらっって……だからっ、見せつけてないんだってば……」

「っっー!?!?!」

「っっこっ……らっ……ちよっと、っおっ……おちんちんっ……こすりつけないでよっ……」

「やっ……ちよっ……ホントっ、やめなさいっ……って、ばっ……」

「(ふぅ……ふぅ……はあ……はあ……)」

「っっ……っ……」

「……はあ……」

「ったく……」

「必死になっちやって……もお……」

「……そんなに、気持ちイイの?」

「……そう……」

「……わかったから……もお……早く、済ませちゃいなさい……」

「ええ……？」

「抱っこしながら……？」

「やあよお……」

「恥ずかしいもん……」

「えええ？ やあよお……」

「ちよつ、つと……もおお……必死過ぎでしょ……もおお……」

「……しょうがないわねえ……」

『がさ、がさ』

「こう？」

「いいの？ これで……」

「ったく……もお……」

「とんだ甘えんぼさんね……」

「赤ちゃんみたいじゃない……」

「そんなにお母さんのおっぱいが好きなの？」

「……もおお……」

「はいはい……」

「ったく……w」

「つつあんっ！ こ、らっ……そこにこすりつけるんじゃないのっ……」

「せめて、ふともとかなさいます……」

「やっ……ちよっ……あんっ！　んっ！……」

「こら、あ、あ……んっ……」

「っっんっ……んっ……んっ……」

「んぶっ！？」

『ちゅっ……ちゅぶっ』

「ちよっ……ぶっ……ぶっ……こらっ……」

「誰が、キスしていいって……」

「あっ……はっ……んっ」

「こ、ら、あ、あ……アンタっ……ホントっ……いいかげんに……」

「あっ、あんっ！……」

「あっ……あっ……あっ……」

「ちよっ……と、お、お……んっ……んっ……んっ！……」

『ちゅっ……ちゅっ……』

「はむ、ぶっ……」

「っっこらっ……ん、ぶっ……」

「し、舌を、入れるなっ……ん　ん　んっ……」

「キスしながら逝きたい、って……アンタ、ねえ……母親と、そんな……あんっ」

「ちよっ……や、っ……ん……」

「せめて、お股にこすりつけるの……っ……やめっ……」

「ふとももとかに……」

『ちゅぶっ……ちゅ……』

「んゝんゝー……っ」

「んぶっ……んっ……ぶっ……」

「んゝーんゝー……♡」

「っっ……っ……っ……!……!……!」

『びく、びくっ』

「っっ……ぶゝあ……あ……」

「(はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……)」

「っっ……ちよっと、お……アンタ……アンタのズボン通り越して、私のズボンまでシミっ
いてるじゃないのよ」

「もおお……」

「私も洗濯して……着替えないと、いけないじゃないの……」

「え……?」

「私っ……!??」

「い、逝ってないわよ……」

「……はぁ……？　ビクビクなんて……してないわよ」

「……うるさいなあ……」

「ちょっとだけよ……軽く、だけ……」

「そうよ……軽イキしただけよ」

「……アンタが必死に、私のお股に、あんたのその凶悪なのをこすり続けるからで……」

「無理矢理よ、だから……」

「私からしたら、事故みたいなもんよ、ホント……」

「もお……」

「ほら、アンタも、シミになるから、早く脱ぎなさいよ」

「いやいや……アンタねえ」

「こんなこと、お父さんにバレたら大変なんだから、さっさと洗濯して、さっさと乾かさないとダメでしょ！？」

「ったく、もおお……」

◆第三章 もうオナニーじゃ物足りないからお風呂に乱入してエモいママに抜いてもらう！告白もする！

『♪♪』

「んー……んんー……♪」

『ガチャ』

「きゃああああああああっ！！！！！！」

「つつ……ちよっ……なにっ!？」

「えっ……え……? 一緒に入るっ!？」

「っ……いやいや……私、ササっと入っちゃうから、外で待ってなさいよ……」

「いやいやいや……一緒に入りたいて……」

「つつ……別に……嫌いとかじゃないけど……」

「つつ……つつ……」

「だって……アンタ……違うじゃん、そういうのと……」

「どうせ……また、エッチなことか……狙ってるんでしょ……」

「……ほらああ……やつばりいい……」

「悲しそうな演技に騙されると思ったら、大間違いよ」

「は? ちよっ……きゃあ!？」

「いやいやいや、『じゃあ』……じゃないわよ。 なによ、『じゃあ』って……」

「ちよっ……こらっあっ……見せつけなくていいからっ……」

「もおおおお……」

「(はぁ……)」

「はいはい、どーぞ……いいわよ、オナニー……しなさいよ」

「ん……」

「どうせ、ダメっていつても、また、溜まってるもの出しちゃうまで言う事きいてくれない
んでしょ」

「だったら、もう、いつそのこと早く、済ませちゃいなさいってことよ」

「……ええ……?」

「おっぱい揉みたいって……ちょっとお……」

「生殺しって何よっ、アンタが入って来たんじゃないの……いきなり……」

「やっ……やっ、ぁ……ちよっ……あっ……ん……」

「こっ……ら、ぁ……ぁ……」

「んっ……ん……」

「も、おお、お……」

「きゃあぁあっ♡」

「ちよっ……あっ……乳首は……だめ、よ……ホント、にっ……あんっ……」

「(はっ……はっ……はっ……はっ……はっ……)」

「も、お、お……」

「んっ……アンタ……よく、まあ、こんなオバサンのおっぱいで……そんな、必死になれるわね……」

「エロいじゃないわよ……母親に対して、もお、お……」

「っっ……ほら、あ……」

「するなら、さっさとしなさいよっ……」

「なによっ……オナニーするんでしょ？ だったらオナニーしなさいよ」

「アンタ……精子出すまで、終わらないじゃないっ……」

「もう、そんなにギンギンなんだからっ……すればいいじゃないっ……」

「っ……はあっ！？ もったいないって、何よっ……」

「え？」

「……ふーん……高めてから射精したほうが気持ちいいんだ……へえ……そうなの」

「知らないわよ、そんなこと……」

「はいはい……勝手にしたらいいんじゃない……」

「(はあ……)」

「え？」

「はあああっ！？ 自分のものにしたって……アンタ、なにをバカなことっ……」

『ちゅぶっ……ちゅ……』

「はあ、ああああ、ああっんん っ！……！」

『ちゅっ……ちゅぶっ』

「あつつんっ……!! こ、っらあっ!! おっぱいっ……吸うなっ……あっ……」

「おいっ……ちょ……こら、あ……」

『ちゅぶっ……』

「んあっ!! あっ……はっ……あっ……あっ……」

「アン、タっ……ホンツトに……こらっ……」

「だからっっ……自分のものって、何よっ……」

「はあ!?! 私をっ!?! アンタの女にっ……!?! なに訳のわからないことっ……っあんっ!! ふああっ……」

「ちよつと、おお……ま、って……待ってよ……お……」

「あっ……あっ……あ……あっ……」

「待ってっばっ……待ってっ……お願いっ……お願いだからっ……」

「(はあ……はあ……はあ……はあ……)」

「いや……だって、アンタ……私を自分のものにして……それね……」

「今、最後までするつもりってことでしょっ……」

「っっ……だからっ……母さんのこと、犯すつもりだったってことでしょ……?」

「え……?」

「……違うの?」

「か、彼女にしたいって……はあ?」

「何、バカなこと言ってるのよ……」

「おかしいでしょ、そんなの……」

「ええ？ 嫌だとかじゃなくて、変でしょって……」

「……好きって、アンタ……いやいや……おかしいでしょ……そんなの……」

「……本気って言われても、そんな……さあ……」

「……本気だから……本当に嫌がってるうちは、最後までしないの……？」

「……そう……」

「え？ んん、っ！？ んぶっ……んゝー……！！！」

「ちよっ……んぶっ……こあっ……」

「こおらあっ……真面目な話して、ちよっとは見直したのにつ……なにを……」

「はあ？ 最後まではしないけど……我慢できないから精子は出したいって……こらっ……」

「はあ……？」

「手でしてって……な、なによっ……」

「え、えええ……」

「私が、手で……アンタのおちんちん……シコシコするの……？」

「……ええええ……」

「っっ……慣れてないわよ、別にいっ……」

「は？お父さんとおっ……？ そりゃ、お父さんとエッチは……してないことはないけど……」

…」

「えええ……？」

「……月に……」回、とか？」

「でも、別に、明るいところではないし……別に、私から触ったりもしないし……」

「きゃあっ！」

「ちよっ……くつつけないでよお……」

「ちよつと、もおおっ！ 私のこと好きなら、嫌がること、無理やりしないでよっ」

「……でしょ？」

「……もおお……」

「ったく……」

「わかったわよ……」

「っっ……ほらっ」

「っっ……」

『じゅふ……じゅふ……』

「っ……これいいの……？」

「はあ……？ もっと上……？」

「……カリ首……？ どこ……？」

「……」

「ふーん……ここ、カリ首っていうの……」

「ここをどうするの？」

「……皮を被せて、カリ首のところをこするの……？」

「……う、うん……」

『じゅぶ……じゅぼっ……じゅぶっ……』

「ちよつとおww……ホントにい？」

「そんな声だすほど、気持ちイイの？」

「やだ……もおお……大げさでしょ？w」

「うそお……」

「ふふ……」

「……え？ おっぱい揉みながらいいの……？」

「(はぁ……)」

「はいはい……どーぞ」

「ったく……エッチな子に育っちゃって、もお……」

「んっ……んっ……」

「あっ……ふ、んっ♡」

「なによっ……アンタがエッチな揉み方するからでしょっ……」

「もおっ……」

「んっ……あっ……んっ……♡」

「(はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……)」

「……ん……もう、逝くの……?」

「え……? はやくっ? う、うんっ……」

「こ、これくらい……? え? もっと……?」

「もっと強く? ええっ……? こ、これくらい?」

『じゅぶじゅぶじゅぶじゅぶ……』

「ちよつと……こんな……大丈夫なの? ちよつと強すぎじゃ……」

「きゃっつ……」

「っつ……やだ、もおお……」

「精子、顔にかかったぁ……」

「ちよつとお……そこらじゅう……もおお……」

「髪にもかかっているし……全部、洗いなおさないとダメじゃないのよお……」

「ったくもおお……」

「ほら、アンタも洗いなさいよ」

「はぁ? いいじゃないわよ! 何言ってるの!」

「……もう出る!?!」

「駄目よっ!」

「そもそも一緒に風呂入るっていつて入ってきてんだからそれぐらい守りなさいよっ」

「何日風呂入ってないのアンタっ」

「ほら、逃がさないわよ。一緒に入りなさい！」

「逃げないの……!!」

「ほらっ!! 頭、洗ったげるからっ……きなさいっ!!」

「ったく、ももおお……」

◆第四章 半年後の、こなれた耳舐めASMRカリ首マザコンプレイ

『ばさっ……ばさっ……』

「ふう……」

「とりあえず、これで午前是一段落っ……」

「……んー……（♪）」

「いい天気い……」

『わしゃっ』

「きゃあっ!!」

「つつ……ちよっ……もおおおおっ……」

「びつつくりするでしょ!!?イキナリ後ろからあ……」

「なあによお……っ……」

「あんっ……!!」

「つつちよっ……こらっ……駄目でしょ!?! ここ、外よっ!?!」

「いや、ベランダは敷地内、だけどお……」

「こ、らあ……ご近所さまに、見られたらどうすんのよ、おっ……」

「ホント駄目っ!! ホント駄目だからっ!! 外はダメだってっ……」

「ちよっとお……!!」

「もおおっ……とりあえず、中、入りなさいっ!!」

『ガラガラ……』

『ピシヤ』

「(はぁ……はぁ……はぁ……)」

「つつ……アンタねえ!! 外ではダメってあれだけ言ったでしょ!？」

「……はぁ!？ 伸びをしたときがエロかったからって……いやいや……もおお……」

「あのねえ……もうちょっと危機感を持ちなさいよ!？」

「私たちの関係がもしバレたら大変なことになるんだからねっ!？」

「……こらっ! ちゃんと聞きなさいっ!！」

「もし、また外であいうことするんだったら、もう、お母さん、何もしてあげないからねっ」

「……つつあたり前でしょ!？」

「……」

「……ホントに?」

「……ホント……に、分かったんでしょね……」

「……つつたく……」

「まあ、いいわよ。そこまで反省してるなら……」

「えええ?」

「……はいはい、わかったわよ。我慢できなくなっちゃったのね」

「もおお……毎日毎日、何回射精したら、気が済むのよ……」

「アンタの性欲は、隔世遺伝ねー……」

「お父さんは、全然なんだから……」

「あー、はいはい……すぐ行くからお部屋で待ってなさい」

「ったく、もおお……」

……

……

……

「ん……」

「はいはい……まずは、お耳からでしょ？」

「わかってるわよ」

「……もう覚えたわよ」

「何回、させられてると思ってんのよ……」

「半年間、ほぼ毎日じゃないの……」

「もお……母親に性的なこと仕込むなんて……ホント悪い子よね……」

「はむ……ペロ……ちゅ……」

「ふふっ……アンタほんと……お耳、大好きねえ……」

「ふううう……」

「じゃあ、反対も……」

「はむ……ペロっ……はむっ……」

「ふふ……はいはい……」

「いつものでしょ」

「……好きっ……すき、すき……だあいすき……」

『ちゅば、ちゅぶっ……』

「かわいい僕ちゃん、だあいすき……」

「んっ……ちゅぶっ……ちゅ……」

「ペロ……れろっ……」

「大好きよ……好きっ……愛してるわっ……」

『ちゅぶっ……ちゅっ……』

「あんっ……逃げちゃダメっ……」

「逃げないのっ……ちゅぶっ……ちゅ……」

「かあわいい僕ちゃん……ママの僕ちゃんっ……だあいすきい……」

『ちゅぶ……ちゅっ……』

「ふふふ……おちんちんムズムズしちゃったの……？」

「あんっ……はいはいっ……ふふ……堪え性のない僕ちゃんでちゅねえ……」

「はあい……おちんちん、いいこ、いいこ……ママのお手で僕ちゃんのおちんちん、いいこいいこ……」

「ふふ……はいはい……」

「お耳はママの舌でいいいいこしようね……」

『ちゅぶ、ちゅっ……ちゅっ』

『ペロ……レロ……』

「大好きよお……」

「愛してるわ……」

「好き好き……好き、好き……だああい好き……」

『ちゅぶ……ちゅぶ』

『レロ、レロ……』

「あんっ♡　なんで逃げるのお……？」

「ふふ……はいはい……」

「じゃあ、きつぎつのテントから、窮屈そうなオチンチン、出しちゃいましょうね」

「はあい、腰、上げてえ……」

『しゅる、しゅる……』

「はあい……こんにちわー……」

「つんつんっ……ふふっ……」

「相変わらず、えぐいおチンポだこと♡」

「はいはい……ちょっと待ってね……」

「僕ちゃんの大好きな、ママのしっとり化粧水で、おちんちん濡らしてから、センズリ、ヌキヌキしようね」

「そうしないと、おちんちん、いたいいたいになっちゃうでしょ……？」

「はあい……じっとしててねえ」

『ちゅぴ……ちゅぴ……』

『きゅぽ……きゅぽ……』

「わああ……しっとりぬるぬるになったねえ……」

「ふふ……」

「はあはあしてる僕ちゃんも、かわいくって好きよお……」

「じゃあ……僕ちゃんがだいすきな……耳舐めしながらの、カリ首コリコリ……しよっかあ」

「ふふふ……ももお……」

「ちよつとお……視点があってないわよ？ 大丈夫かしら、この子ったら……ふふ……」

「ん……」

『ペロっ……レロっ……ちゅぷっ……ちゅび……』

「反対のお耳も……」

『ペロ、レロ……ちゅぷ……ちゅぷ……』

「こおらあ……動きすぎよお……」

「そんなに動いたらおセンズリ、しこしこずらいでしょ……？」

「男の子でしょお……我慢……我慢……♡」

「腰へコヘコしないで、我慢よお……」

「ちゃあんと我慢我慢したら……そのぶん、きもちいいアヘアへ天国に逝けちゃうんだから……」

「ふふっ……♡いいこねえ……」

「大好きよお……」

『ふうう……』

「はあい……カリ首こりこり再開するわね……」

「カリ首こりこり……こりこり……カリ首こりこり……こりこり、こりこり……」

「同じとこだけ……ずっと……コリコリ……こりこり……」

「ふふ……いたり、きたり……」

「同じとこだけ……いたり……きたり……」

「カリ首コリコリ……カリ首、コリコリい……んー……気持ちいいねえ……」

「そうよねえ……きもちいいわよねえ……」

「ふふ……」

『ちゅぶっ……ちゅぶ……ペロ……レロ』

「こいこいしながりゃあ……ペロ……んっ……」

「耳もいじめひやおうかひあ……ペろ……レロ……」

『ちゅぶ……ちゅぶ……レロ、レロ……』

「あんっ♡」

「この手の感触はぁ……♡」

「たまたまが、せりあがってきたわ……♡ふふ♡」

「たっぷりパンパンにザーメンが入ってる重たい、僕ちゃんの精子タンク♡」

「僕ちゃん、天国に逝きそうなのね……かぁわいい……♡」

「おちんぼ気持ちイイねえ……♡」

「ん？♡」

「ふふ……耳舐めしながら逝きたいの……？」

「はぁい……♡」

『ちゅぶっ……ちゅぶ……へろ……レロ』

『ちゅぶ……ちゅぶ……レロ、レロ……』

「あんっ♡」

「……あっつい……♡」

「僕ちゃんのおチンポみるく……ママにかかったねえ」

「ふふふ……いいこねえ……お利口にお射精できて、いいこ……」

「ん……♡ よしよし……いいこいいこ……」

「ふふ……もお……息子がマザコンだったなんて……お母さん、ビックリよ……ホント……」

「ははは……さささ……」

「うう……♡」

◆第五章 ママとの恋愛事情

『ガヤガヤ……ガヤガヤ……』

「ん〜……今日は、どうしましょ……」

「あら……和牛が半額じゃない……」

「……ふふ……じゃあ今日は、あのマザコン息子が大好きな、すき焼きでも……」

「……あれ？」

「……え？ あれって……」

「……あの子よね……？」

「……は？ なんで女の子と歩いてんのよ……」

……

……

……

……

……

「なによ」

「今日？ 今日はチンジャオロースよ」

「……ピーマン嫌いとか子供みたいなこと言ってんじゃないの」

「あ、それとピーマンの肉詰めもあるわよー」

「おいしいわよお……お母さん、これ、だいすきなの」

「それと……あとは、これっ」

「ピーマンも入った特製青汁よ」

「大丈夫よ、ちゃんとリンゴも入ってるんだから、そんなに……」

「え？」

「……怒ってないわよ」

「別に全然、普通よ」

「……だからぁ……普通だってば……」

「え？ ごめんなさいって……」

「……ふーん……」

「……なによ、何か思い当たる節でもあるの？」

「……」

「マッチングアプリい！？ なによそれっ……」

「それで女の子と歩いてたの!？」

「っっ……ぁ……」

「っ……そうね、まあ、そうよ……買い物してたときにね、たまたま見ちゃって……」

「いや、でも……アンタ……」

「私の事が好きとか言っておいて……なんでマッチングアプリなんてしてんのよ」

「いや別に怒ってるわけじゃないけど……でも……」

「はあ？ 正式に付き合ってくれてないって言っても……アンタ……半年も色々させとい
て……」

「エッチもさせてくれてないって……いやいや……それは、ねえ……」

「だって、さすがに……」

「え？」

「私の気をひくためにプレゼント……？」

「うそ……え？」

『ごっつ』

「……これを、買いに行くために、アドバイス貰ってただけ？」

「友達いないからマッチングアプリでアドバイスくれる子を探してたの……？」

「っっ……そっか……」

「……ん♡」

「……あけていい？」

『ガサガサ……ガサ……』

「あらっ……あらあら……」

「いいじゃない、これ……ポシエット？」

「へええ……」

「私がこういうの欲しいって言ったの覚えてたんだあ……」

「ふーん……♡」

「でも、高かったんじゃないのー？ バー〇リーでしょ、これ……」

「バイトー？」

「あ……昼いなき、アンタ……バイトしてたの！？」

「あらあら……そお……」

「……え！？」

「社員登用！？ ホントに？ アンタ、じゃあ働くの？」

「やだ、もおお……働く気なくなったのかと思ってたわよ」

「会社やめてきて、もう結構たつから……」

「……つつええ？」

「私の気を引きたいからって……えええ……？ w w w」

「社会人のほうが、かつこよく見えるって……」

「なによ、それえ♡」

「そもそも、いい大人なんだから働いて当然でしょお？♡」

「えええ？♡」

「もおお……なんでそんなに母さんの事が好きなのよお……♡」

「マザコンなんだからあ……」

「ふふふ♡」

「あっ……ね、そういえば和牛を買って来たから、すき焼きにしましょうか♡」

「え？ チンジャオロース？」

「いいわよ、明日で……」

「母さんピーマン苦手だもん」

「ふふ♡」

「すごいわよお……なんたって100g1000円のが、半額だったんだからあ……」

「ん……はいはい……すぐ作るわねえ……」

「ふふ♡」

◆第六章 念願のママとの初エッチと性教育で腰へコ！

「いってらっしゃーい、気を付けてねえ」

『ボタン』

「……ふう……」

「はいはい、どうせ後ろにいるんでしょ？」

「……エスパーじゃないわよ。経験よ」

「ったく、もお……」

「いつまでたっても子供なんだから……」

「……っわかってるわよっ……もお……」

「母親、口説き落とすなんて、とんでもなく悪い子なんだからあ、もお……」

「洗い物だけしてから行くから、お部屋で待ってなさい」

「……だめよっ、洗いものはすぐ終わらせないと気がすまないのっ」

「イイ子だからおとなしくお部屋で待ってなさい」

「あら……いい子じゃない」

「ん……いい子いい子……」

「ふふ……」

……

……

……

……

『ざあああ』

『かたん、ガチャ』

……

……

……

……

『トントントン……』

「入るわよー」

『ガチャ』

「……おまたせー」

「あら……」

「……つふふ……やだあ、もお……おちんち手で抑えてるの？それ……」

「なによ、それえww そうしてないと我慢できないの？」

「もおお……猿みたいじゃないww」

「きゃっ」

「ちよつとおお……まあだ……ガツツかないの」

「あっ……やつ……ちよっ……」

『バフィンっ!!』

「あんっ、もお……」

「ホントにするの？」

「いいのかしらねえ……親子なのに、こんなこと……」

「はいはい……わかったわかった……もうこの話は終わったわよね……はいはい……」

「ん……じゃあ、はい……どうぞ……」

「……」

「……ん？ なに？」

「するんでしょ？ エッチ」

「ほら、どうぞ」

「……」

「……ふふ……なあによ、さっきまであんなにガッツいてたのに、急にどうしたの？」

「ふふ……どうしていいか、わからなくなっちゃった？」

「あらあら……」

「もおお……」

「ほら……じゃあ、おいで……」

「ん……まずは、キスから……」

「ん……」

『ちゅっ……』

『ちゅ……』

「口、あけて……」

「ん……ちよつと舌出して……」

「そう……」

『ちゅぶっ……』

『ちゅ……』

『レロ……ちゅぶ……』

「んっ……ん……」

「んぶっ……あゝんっ……」

「んっ……ん……んぶっ……」

「っっ……」

「ふふ……ね？　まずはキスから……でしょ？」

「ん……」

「じゃあ……お母さんのこと、脱がせてくれる？」

「ん……」

『シユル……しゅる……』

『バサっ……』

『しゅる…… バサっ』

「ありがとう♡」

「ん……ブラジャーは、ホックを外すのよ」

「大丈夫、簡単だから……」

「……ね？ 簡単でしょ？」

「うん……ブラジャーも脱がせて……」

「……」

「あんっ♡」

「もおおっ……こらあっ……吸い付かないの……あんっ♡ あっ……あっ……」

「ふふ……調子もどってきたじゃないっ……んっ……ん……」

「お母さんがいないと、何もできないんだから……」

「ん？ はいはい……そうね……こういうときはママっていう約束だったわね」

「ったく、もお……ほんとマザコンなんだからあ♡」

「はあい……ママよお……」

「おいでえ……」

「んー……いいいいいこ……」

「ふふ……」

「あんっ♡っんっ……あっ……」

「もおお……赤ちゃんみたいっ……んっ……んっ……あっ……」

「エツチな赤ちゃん……あんっ……♡」

「あっ……あっ……あっ……あっ……んっ……あっ……あんっ……」

「(はあ……はあ……はあ……はあ……)」

「ん…… 落ち着いた……?」

「……なあによ、そんな切なそうな顔しちゃって……」

「ふふ……おちんちんが、せつないの……?」

「……はいはい……」

「じゃ、挿れよっか……」

「ん、そのままでもいいわよ……」

「ママが手で導いてあげるから……」

「……あら♡」

「ふふ……カッチカチ……」

「石みたい♡」

「若いわねえ……」

「……ん……ほら、ここっ……」

「ここがママの、おまんこよ……」

「アナタが出てきた場所……」

「ふふ……おかえりなさい、ね♡」

「……あんっ♡ 急にハアハア言わないのっ……♡」

「ん……普通に、そのままっすぐ挿れてきて……」

「っっんっ……そうっ……あっ……あっ……」

「(はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……)」

「んっっんっっ!!」

「おっっ、ほっ……お……」

「っっ奥まで、届いてるわっ……」

「んぐっ……」

「っっすごいじゃないっ……」

「(はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……)」

「っっお父さんっ……?」

「お父さんは……奥までは、届かないわっ……」

「それに、こんなにカチカチじゃない、っしっ……」

「んっ……」

「ホント……アンタ、誰に似たんだかっ……」

「ふふっ……もお……」

「はいはい……僕ちゃん、ね……」

「エッチのときは、ママと、僕ちゃん……ね」

「はいはい……ごめんなさいね……」

「もお♡……マザコンにも程があるでしょ……」

「んっ……」

「次は、普通に……引いたり、ついたり……」

「うん……いつも手でおちんちんシコシコするときの代わりに、おまんこを使って、おちんちんをシコシコして射精するのよ……」

「ん……そう……最初はゆっくり……」

「あっ……っんっ……」

「んっ……あっ……あっ……」

「あんっ……あんっ……あんっ……あんっ……」

「そうっ……上手よっ……いい感じよっ……あんっ……」

「(はあ……はあ……はあ……はあ……)」

「あっ……あんっ……あんっ……あんっ……あんっ……あんっ……」

「っすっいいわっ……」

「ゆっくりなのにつ……奥までズンズンつくるっ……っ……」

「固くて……太いからっ……丸太みたいっ……っっあんっっ！……」

「あんっ……あんっ……あんっ……あんっ……あんっ！……！」

「つつん……？ うん……慣れてきたら、速く動いても大丈夫よっ……」

「いいわ……おいで……」

「うん……僕ちゃんが気持ちいいように、好きに動いていいのよ……」

「ママが僕ちゃんの性欲、ぜえんぶ受け止めてあげるっ……」

「ん……おいで……」

「あゝん っっ！……！」

「つつあん っ！……！ あっ っ！……！ ん ん ん っっっ！……！」

「つつはあ、ああああああっんっ！……！」

「つつす、っご、い、いっ……」

「いいイっ……いいわっ……僕ちゃんっ……つつ」

「ママっ……つつごぐ、いっ……」

「おっ……っほっ……おっ……」

「お っ……お っ……お っ……お っ……お っ……お っ……」

「つつほおおお っ……」

「これっ……やっぱっ……つつぐっ……」

「僕ちゃ、んっ……ホントにっ……すっごっ……いっ……」

「あひっ……っ……（か）あ……」

「あゝうゝあゝうゝあゝうゝあゝうゝ」

「あゝ、だゝめ……………こゑらへうゝ……………」

「（へ）お……………」

「おゝうほ……………」

「いづづ……………僕ちゃん……………ママ……………らうちやう……………」

「もゝむ（り）……………」

「（……………う……………う……………う……………う……………う……………）」

「こゑ……………」

「……………の……………き……………やう……………」

「アクメ……………！あくめ……………ちやう……………う……………！……………」

「……………う……………」

「……………」

「お……………お……………お……………お……………お……………お……………お……………」

「……………………………………………………………………………………………」

「…………………………」

「……………」

「……………」

「（…………………………………………………………………）」

「(はぁ……はぁ……)」

「……ん……あら……?……もしかして僕ちゃんもママと一緒に逝けたの……?」

「そっか……」

「すごいじゃない……初めての男の子って、そんなに上手に逝けなかったりするのよ……」

「ふふ……僕ちゃんはいいい男の才能があるわね……」

「女の人をおちんちんで自分の雌にしちゃう才能があるわ……」

「ふふ♡ ママも……すっごく良かったわよ……」

「何十年もずっと忘れてたみたいな、すごいアクメきちゃったわ……」

「ふふ♡ あ……ほら……だって、まだちょっと痙攣してるもの……」

「そうよ……ママ、僕ちゃんに逝かされちゃったの♡」

「すごかったわ……まだ、ちょっと天国にいる感じするもの……」

「ん……? ええ?♡ まだ出したいの?♡」

「ふふ……♡ やだもお……ホントに性欲が強いよね……」

「素敵よ……♡」

「あん♡ ええ? 今、すぐっ!? うそお♡ あっ……ダメっ……ママまだ逝ってるから♡」

「やん♡ あっ、あっ……っつあああああん♡」

「お、おほっ……ほお、おお……」

◆第七章 毎日ママと猿並みマザコンイチャラブ性活！！オホ声アヘアヘ天国で極上アクメ！

「いってらっしゃーい」

『ボタン』

「……ふう……」

『トントントントン……』

『ガチャ……』

「あら？」

「まだ寝てるのかしら……？」

「もおお……」

……

……

……

「あらあら……可愛い寝顔ねえ」

「ふふ……」

「いつまでたっても、寝顔は天使よねえ……」

『ごそ、ごそ……』

「ふふふ……」

「一緒に、寝ちゃおうかしら……」

「……あら、でも……起きそうね……」

『ガサ、ゴソ……』

「……ふふ……」

「……ばあっ」

「あは♡」

「やだっww そんなにビックリした？ww」

「ふふ……ええ？ いや、可愛かったから一緒に寝ようかなあって思って♡」

「ええ？ ダメよお、もう起きなさいよ」

「アンタ、もうすぐ就職きまつてるんだから……今から生活を慣らしておかないと……」

「だめえ……おきなさい♡」

「もおお……」

「だめよお……ちよっとか言って放ついたらアンタ昼まで寝るじゃないっ……」

「……もおお……」

「……おきないならあ……」

『じゅぶっ……ちゅぶっ……』

「あん♡」

「だって、起きないんだもん♡」

「起きないから耳を襲われちゃうのよ♡」

『じゅぶつ……ちゅぶつ……ちゅぶつ……ちゅぶつ……』

「ふふ……目え覚めてきた？」

「……じゃあ、反対も、する？」

「ん……横向いて……」

『じゅぶ……じゅぼ……ちゅぶ……』

「ふふ……」

「これ、なんか、私が押し倒して襲ってるみたいねっ……」

「はあ……はあ……はあ……」

「え？ 目が怖いって……？ アンタだっていつも怖いじゃない……」

「こらっ……逃げないの……」

「ふふ……」

「えいつ……」

『ぎゅううううううう』

「なあによお……乳首つままれたぐらいでっ」

「ふふ……こっちもっ……」

「ええいつ♡」

『ぎゅうううう』

[.....] [.....]

「……なあによお、嫌がったフリしちゃってえ……」

「どうせ……こっちは……」

『ぎゅううう……』

「ほらあ……勃起してるうう♡」

「お見通しなんだからねえ……もお……」

「ふふ……」

「だめえ」

「ごはんの前に、一回するのっ……♡」

「ええ??」

「アンタ性欲凄いんだから、どうせ今したってご飯の後にもするんじゃないっ……」

「休みの日は、結局、絶対♡♂回はするんだから……」

「……ふふ……」

「ほおら、もお……じれったいわねえ」

『ちゅぶっ……ちゅっ……』

「んっ……」

「んっ……」

「ちゅぶ……」

「んっ……」

「ふふっ……ほんとーに襲っちゃおうかしらっ……」

『がさ、がさ……』

「つつえいつ……」

「えい……えいつ……えい……」

『しゅるしゅる……』

「はあい、すっぽんぽん」

「ふふ……」

「朝からホント元気ねえ、この子は……♡」

「あはっ♡チンピクかわいっ」

「……」

「じゃあ、私も……」

『しゅる、しゅる……しゅる……』

『パサッ』

「ふふ♡」

「どう？♡」

「そ……買ったの♡」

「だって、アンタ、こういうの好きでしょ？」

「そうよー、アンタのためにわざわざ朝から着てたのよ♡」

『ボーン』

「きゃあんっ!!♡」

「襲われるう♡」

『ガサガサ、ガサガサ……』

「やぁ〜ん♡ おかされちゃうう♡」

「ん……ふふ……」

「その気になってきた？」

「あんっ……ふふ……あっ……あっ……あっ……」

「んっ……んっ……♡」

「ん……そう、そこ小窓つきだからっ……リボンをほいたら、そのまま挿れられるの……」

「かわいいでしょ?♡」

「あ……あんっ♡」

「(はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……)」

「うん……挿れて……」

「はいはい……わかったわよ……」

「……ママのおまんこに、僕ちゃんのたくましいおちんちんを入れて逝かせてくださあい♡」

「ふふ……変態♡」

「いつもエッチな言葉、言わせるんだから……♡」

「……あっ……」

「あっ……んっ……」

「ああああ、あ、あ……」

「きた、きた……きた、あ……♡」

「(はあ……はあ……はあ……はあ……)」

「すっごい、いっ……いっ……」

「何回、挿れてもっ……慣れないわっ……♡」

「おっおっ……っほっ……おっ」

「(ふっ……ふっ……ふっ……ふっ……ふっ……)」

「あっ……あっ……あっ……あっ……あっ……あっ……」

「(ひっふっうっうっ……)」

「つつっ素敵よっ……んっ……ホントに素敵っ……っあっ……は、んっ」

「もうっ……コレがない生活が考えられないわっ……♡」

「おうっ……おっうっ……」

「お、お、お、お、おっ……おっ……」

「つつ……え……？んっ……そうよっ……昨日の夜、から楽しみにしてたんだから、」

「朝ごはん食べるのなんて、待ってられないわよっ……♡」

「すごいわっ……僕ちゃんがママに新しい気持ち良さを教えてくれてるわっ……」

「あ、ああ、あゝあ、あ……」

「全身がっ……おまんこと繋がってるっ……感じよっ……」

「痙攣しちゃうのっ……」

「(はっ……はっ……はっ……はっ……はっ……はっ……)」

「ああゝあゝあゝあゝ……」

「素敵っ……んっ……あゝっ……」

「素敵よっ……」

「たくましいわっ……」

「好きっ……好きよっ……」

「私も、好きっ……」

「(ふー……ふー……ふー……ふー……ふー……ふー……)」

「あゝー……いいゝ……っっ……」

「ほんっつとに……きつもちいゝゝゝゝ……」

「また軽イキしてるっ……っっ……んゝ……」

「何回も……連続イキするのっ……最高よっ……♡」

「ママ……幸せよっ……」

「(はあ……はあ……はあ……はあ……)」

「……さい、つこお……お……」

「あ、ふ……ん♡」

「しえいし……でてう、う……♡」

「つつ……あゝあゝ……」

「つ　お　う　つ　…　お　づ　…　お　う　づ　…　お　…　う　…　づ　…　つ」

[!...!!...]

「んおっおっ　ミ　お　づ……おほっ……お　づ……」

「ママ、とっ……いっひよにつ……つつ……」

「っうん　づ……いこつ……ママと一緒にいこつ……」

「ぼくひゃんも、いぐのっ？」

◆オマケ章 再就職先で挫折。でもママはやっぱり一番の味方！全肯定のよしよしフェラ！

『ガチャ……』

『ボタン』

「……あら、おかえりなさい」

「ごはんは食べてきてないんでしょう？」

「……あれ……？……どうしたの……？」

「ん？」

「……あらあら……どうしたの？」

「そっか……つらくなっちゃったか……」

「ん……」

「いいのよ……」

「うん……辞めてもいいわよ」

「ちょっとミスしたぐらいで、そんなに怒るなんて酷いわよね……」

「そんなとこ辞めて他のところで働けばいいじゃない」

「ん……ホントにいいわよ」

「そのために支えるのが親だもの」

「ん……大丈夫よ……」

「つらかったね……」

「ん？」

「ふふ……そんなの気にしないでいいのよ」

「ミスするのも、当たり前だし、怒られたら逃げたくなるのも当たり前よ……」

「ええ？（笑） それも大丈夫よ。普段、他人には厳しいこと言ってるのに自分には甘いのも普通」

「そうよ、普通よ、大丈夫」

「ふふふ（笑） そうなの？ ネットに書き込みしたら思いのほか叩かれたの？」

「もおお……いいじゃない別に……」

「ネットで叩かれても、私は味方よ」

「それでいいじゃない」

「ん……よしよし……」

「アナタは何も悪くないわ……いい子だもの……」

「私は、アナタがイイ子なのをよく知ってるわ……」

「はあい……いいこ、いいこ……」

「ふふ……いいこ、いいこ……」

「いいこねえ……」

「……ん？」

「ちょっと落ち着いた……？」

「あっ……」

「あらあら……」

「こっちは全然、落ちてないねえ……」

『ぎゅうう』

「なあに、これ……」

「悲しいフリして、お母さんにおチンポこすりつけて楽しもうって魂胆だったの？」

「ふふ……大丈夫、わかってるわよ」

「ホントに今日はつらかったんだもんね」

「ん……じゃあ、ママがあ……僕ちゃんのおちんちんから、ぜえんぶ、吸いだしてあげるっ」

『カチャ……カチャ……カチャ……』

『しゅるしゅる……』

「あんよあげてえ……」

『しゅる……しゅる……』

「はあい、パンツも……つばあ♡」

「あああんっ♡」

「たくましいのが、こんにちは、しちゃったねえ……♡」

「僕ちゃんは弱虫なんかじゃないわよねえ……こおんなにたくましいんだから……♡」

「ふふ……」

「ママが、僕ちゃんのつらいのぜえんぶ、このタマタマから吸いだしてあげる……」

「はむっ……ちゅぷ」

「ちゅぱっ……ちゅぷっ……ちゅっ……」

「ちゅぶっ……ちゅっ……」

「……んぷっ……ん？　なあに？」

「……あっ……そうよね……ごめんなさい……」

「ママが、服着たままだと、僕ちゃん、逝きにくいよねえ……」

「はいはい……そうね、見せつけてるわよ♡」

「だって、そのほうがシコいでしょ？」

「すぐ、脱ぐわねえ……♡」

『しゅるしゅる……しゅる……』

「え？　下ははいたまがいいの？」

「ブラジャーは？　ブラジャーはとるの？」

「ふふ……変な僕ちゃん……」

「変態さんだね」

「マザコンな上に、変態さん♡」

「……ん？　なあに？　何も悪いなんて言っていないじゃない……」

「普通よお……」

「むしろ、いいことじゃない……マザコンで変態さんで……かわいいじゃない……♡」

「ね？ ママがぜんぶ、受け止めてあげるんだから……」

「ふふ……♡」

「はい、これでいいの？ 下だけ残して他は脱いだわ」

「そう？ ふふ♡ じゃあ、しゃぶるわね」

「ん……」

「ちゅぴっ……ちゅぷっ……」

「ちゅっ……ちゅ……」

「レロっ……れろれろ……」

「れろれろ……」

「つつあんっ♡ 我慢汁すごいっ♡ ふふっ……元気出てきたじゃない♡」

「その調子よ♡ もっともつと僕ちゃんの幸せな顔、ママに見せてっ♡」

「ちゅぴっ……ちゅぷっ……」

「ちゅっ……ちゅ……」

「レロっ……れろれろ……」

「れろれろ……」

「んぷっ……ん……シコシコも……？」

「ん……わかったわ……」

「根本のほうを、センズリ、シコシコしながら、しゃぶるわね」

「いっぱい精子出るように……タマタマもマッサージしてあげる♡」

「ちゅぴっ……ちゅぷっ……」

「ちゅっ……ちゅ……」

「レロっ……れろれろ……」

「れろれろ……」

「あんっ♡ 腰へコしないの♡」

「暴れたらしゃぶりにくいでしょう？♡♡」

「ふふ……♡」

「ちゅぴっ……ちゅぷっ……」

「ちゅっ……ちゅ……」

「レロっ……れろれろ……」

「れろれろ……」

「っっ……ふふ♡」

「あらあら……タマタマがせりあがって……もうピュッピュッそうじゃない♡
心配したけど、ずいぶん元気♡」 ふふ……

「はい、シコシコ……シコシコ……シコシコ……しこしこ……」

「そろそろかなあ？」

「ん？♡ ふふ……そうね、ごめんなさる♡」

「お口でチンポきもちよくなつてえ……お口にザーメンぴゅっぴゅつてしたいもんね……」

「はあい」

「ちゅぴっ……ちゅぷっ……」

「ちゅっ……ちゅ……」

「レロっ……れろれろ……」

「れろれろ……」

「つつんっ……んっ……」

「んゝゝゝっ……」

「ンんンっ……」

『ごくっ』

「っぷあ……んゝ……」

「すっごい量……っ……」

「喉に絡んじゃうっ……んっ」

「特濃ね、これは……」

「ん……いいのよ……僕ちゃんが元気な証拠なんだから」

「おいしわ、僕ちゃんの、おチンポミルク♡」

「ふふ♡」

「……でも、どうせ、まだまだ出し足りないんでしょう？おチンポみるく♡」

「ふふふ♡そりやそうよ。 ママだもん。 僕ちゃんのことは何でもお見通しですよ♡」

「じゃあ、ベッド、いこっか♡」

「ベッドでパコろ？♡」

「ん……ほら、あんよ気を付けて……はあい、たち上手う……」

「ん、いいからいいから、掃除はママがしてあげるから、ね」

「ふふ……♡」

「ん、大丈夫よ……ママは何があっても、僕ちゃんの味方なんだから……」

「ふふふ……♡」

「大好きよ……♡」

「あんっ……もおお……続きはベッドで……あんっ♡」

「やああん♡ もおお、やだあ♡ベッドだつてばあ……♡ああああん♡」